

オリンピック放送の原点

～ラジオと1924年オリンピックの時代～

脇田 泰子 (椋山女学園大学)

The Dawn of Olympics Broadcasting – Radio and the 1924 Olympics –

WAKITA Yasuko (Sugiyama Jogakuen University)

Abstract

The 2012 London Olympics were a great turning point in modern Olympic history, giving birth to the terms “Digital Olympics” and “Socialympics” due to the effective merging of the Internet with conventional broadcasting in the coverage of the event.

The present paper begins with an examination of how the Olympics were initially covered by the media, especially up to the first decade of the 20th century mainly in print media. At the time, the word “media” was largely synonymous with “press”, as the print media – which literally used press machines to create their product – had no real rivals as sources of information for the vast majority of people. The earliest popular views of the Olympics were thus determined by print media’s coverage. Next, the paper proceeds to a discussion of the ways in which the very first form of broadcasting, radio, was initially perceived in the West, especially France and Britain, as a feasible medium for sports coverage. Particular attention is given here to Britain, where sports occupied a surprisingly prominent place in radio broadcasting even in the latter’s earliest years, on par with coverage of such “serious” matters as the weather and the doings of the royal family.

The paper’s main and final section is a consideration of a specific example of the close historical relationship between the Olympics and broadcasting, namely radio coverage of the 1924 Games. It focuses on the coverage in France, with the brilliant activity of Edmond Dehorter, the first radio sports reporter in that country.

In the course of the above discussions, this paper attempts to demonstrate how a detailed examination of the history of sports and media will reveal that the essence and significance of the close relationship between the Olympic Games and broadcasting can be found as far back as the earliest days of radio, a period which not only witnessed the dawn of Olympics broadcasting but also had significant parallels with the present, which is experiencing the “dawn” of yet another powerful and influential form of media – social media – and the latter’s rapidly expanding role in information dissemination.

はじめに

2012年ロンドン・オリンピックは、1世紀余り続く近代オリンピックに於けるメディア¹⁾の歴史に、大きな変化をもたらした。それは、従来の「テレビ放送」²⁾に、情報通信の完全デジタル化とソーシャルメディアへの本格対応という「インターネット通信」³⁾の新潮流を導入し、史上初の「デジタル五輪」、「ソーシャルオリンピック」(英語ではソーシャルオリンピック Socialympics)を実現させたからである⁴⁾。このようにロンドン・オリンピックは、テレビ放送とインターネット通信との融合という、まさに視聴シーンの大枠を21世紀型に作り変え、新しいサービスの方向性を打ち出した点で、オリンピックの放送史上、画期的な大会だったと評価できる。

オリンピックと放送メディアとの関係は、インターネット常時接続を前提とする時代の新潮流を今後、放送局が番組制作にどう取り込むか、テレビ単体に止まらず、PC、スマートフォン、タブレットをも含めた4種類全ての通信・放送機器向けサービスを如何にして視聴者に提供できるかというオンライン戦略への取り組みにかかっている、といったことを抜きにして論ずることはできない。つまり、我々は現在、インターネットとソーシャルメディアという新たな情報通信メディアとの出会いの中で、放送の新しい時代の幕開けに立ち会っているのであり、オリンピック放送もそこから逃れることはできないのである。

以上のような現状認識に立ち、オリンピックと放送との関係性の本質と意義について、今日的な視点のもとで考察を試みたいと考えている。そこで本稿では、特に、ラジオ草創期のオリンピック放送と当時の社会情勢について取り上げる中から、スポーツとメディアとが、どのような関係性を有していたかを検証し、スポーツ史に於けるオリンピックと放送との位置付けを考察する。なお、日本における放送とスポーツについては、橋本一夫の『日本スポーツ放送史』や、杉山茂の『テレビスポーツ50年』が、オリンピックと放送

との関係を多角的に考察した優れた先行研究になっている。本稿は、これらの研究成果を踏まえながら、初めてのラジオ放送が行われたと考えられる1924年シャモニー冬季オリンピックと、初のラジオ生中継も行われたパリ・オリンピックについて、新出資料を提示するものである。これにより、これまでのスポーツ放送史にはなかった視点からオリンピックと放送との関係について考察が可能になると考えている。

1. メディアとオリンピックとの出会い

1. オリンピックとラジオ放送

近代オリンピックが1896年にギリシャのアテネで初めて開かれ、国際社会に根付いていった20世紀前半は、マス・メディアが飛躍的に発展を遂げた時代とも重なる。新聞、写真電送に次ぎ、第一次世界大戦後には、音声によるラジオの時代が到来した。公式記録によれば、オリンピックのラジオ生中継が実現したのは1924年パリ・オリンピックである。根拠とされるのは、まずIOC(国際オリンピック委員会)オリンピック研究センターが、1896年第1回アテネ・オリンピックから1984年第23回ロサンゼルス・オリンピックまでの夏季オリンピックの概要をまとめた資料のうち、1924年第8回パリ・オリンピックに関して、「初もの」という項の最後に挙げられている「ジャーナリストのエドモン・ドゥオルテル(Edmond Dehorter 1876-1965)がラジオで初めて生中継リポートを行った競技がある」⁵⁾という記述である(ドゥオルテルについては第3章で詳述する)。また大会の主会場、コロンブ・スタジアムがあったパリ西部オー・ドゥ・セヌ(Hauts-de-Seine)県内の歴史遺産についてまとめられた県議会ホームページのパリ・オリンピックのコーナーにも「ラジオ中継のおかげで、相当数の大衆が競技の展開をライブで追うことが出来るようになった」⁶⁾とある。さらに英国国立図書館(大英図書館)のホームページが、「スポーツと社会：社会科学の目から見た夏季オリンピック・パラリンピック」として所蔵資料についてまとめた中にも、「1924

年パリ・オリンピックはラジオで生中継された最初の五輪である」という一文がある⁷⁾。

しかし、生中継という条件を除くと、ラジオで初めてオリンピックが放送されたのは、実はパリよりも半年早い、1924年初めにシャモニーで行われた冬季オリンピックの時であった、とフランスのラジオ放送史の専門家、J.M.プランツ (Jean-Marc Printz 1956-) ⁸⁾ が述べている。氏が15年以上にわたって運営する「ラジオの百年」というフランスのラジオ史を年別にまとめたホームページの1924年の欄の冒頭には「既にこの年の初めには、サッカーやラグビーの試合に加え、冬のシャモニー・オリンピックについても、(フランスのラジオでは) スポーツのリポートが数多く行われていた」と記されている⁹⁾。管見によれば、シャモニー・オリンピックでラジオ放送が行われていたことが本邦で紹介されるのは本稿が初めてである。もし伝えられる通りであるならば、後に第3章で詳述するが、工夫を凝らした準実況風、疑似生中継によるラジオ放送が冬季のシャモニー・オリンピックで行われたことになる。また、この時からわずか半年でオリンピックのラジオ初の生中継放送が、パリ・オリンピックで実現したことになる。この間にラジオの放送技術が急速に向上し、生中継を可能にさせた、あるいは、ラジオ人気は社会に広まったなどの要因が背景にあるということにもなる。

日本に於けるラジオ放送初のオリンピック生中継は、「前畑がんばれ！」¹⁰⁾ で知られる1936年ベルリン・オリンピックの時であったが、ヨーロッパではその10年以上前から、スポーツやオリンピックを介してラジオ放送が社会に定着していったのである。音声を通じたラジオは、刻一刻と状況が変化し、手に汗握るスポーツの今をそっくりそのまま伝えることが出来る。活字とは異なり、スポーツにとって必要不可欠な「同時性」を備えたメディアであり、スポーツを報じるにあたって極めて好個の媒体・手段といえた。そのことを要因として、ラジオはスポーツを介して飛躍的に社会に歓迎され、伸長していく現象を招来し、両者

の緊密な関係性が構築されたと考えられる。

2. 1924年冬：シャモニー・オリンピック

1924年1月25日から2月5日までの2週間弱、ヨーロッパ大陸最高峰のモンブラン(標高4,810m)の麓に広がるスキーリゾート、シャモニー¹¹⁾で、オリンピック史上初の冬季大会が開催された。ただし、これは最初から「冬季オリンピック」として行われた訳ではない。もともとアルプスと国境を接する国々の間では、第一次世界大戦前から「国際冬季スポーツ週間」と呼ばれる大会が開催されていた。冬季バージョンのオリンピックの導入を模索していたIOCはこのイベントに注目し、1924年大会の後援団体になり、規模を試験的に拡大してシャモニーで実施した¹²⁾。その結果が大成功だった¹³⁾ ことから、翌1925年のIOC総会でこれを初の「冬季オリンピック」として追認し、以後も夏季オリンピックと同様、4年に一度ずつ開催する、と決めたのである。

このシャモニー冬季オリンピックで初のラジオ放送が行われたとする結論を、プランツはフランス国内の関連資料や関係者インタビューなどを総合して導いた。では、なぜ、オリンピックの主催者であるIOCや、それぞれの大会の組織委員会等がまとめた公式文書にシャモニー・オリンピックでのラジオ放送に関する記述がないのか。これに関しては詳らかにし得ない。しかし、その記述がないからといって、ラジオ放送がなかったとは断言できない。そもそも放送音源については1930年代まで、ごく特別な場合を除いて録音・保存がなされていない¹⁴⁾。したがって現地からの生中継だったか否かを問わず、放送された事実そのものを、現存する番組音源から確認することも不可能であり、それを実際に聞いたという人たちの証言だけが頼りである。このような資料的制約から、オリンピックに於けるラジオ放送の始源を明確にし得ないが、両者の関係という問題を考察するにあたって、シャモニー・オリンピックでラジオ放送が行われたとする説があることには言及する必要があるだろう。

3. シャモニー・オリンピックに於ける取材・広報体制

史上初の冬季オリンピックであるシャモニー・オリンピックでラジオ放送が行われたことについて触れる前に、この大会に於けるマス・メディア全般の取材・広報体制について見ておきたい。シャモニー・オリンピックの公式報告書は、3か月後の1924年5月4日に始まる第8回パリ・オリンピック（7月27日閉幕）の公式報告書の一部に組み込まれ、これらは総計で852ページに及ぶ大作になっている。編纂者は、今で言う大会組織委員会に当たるフランス・オリンピック委員会である。シャモニー冬季大会の競技についてはp.643～p.721に、運営活動状況についてはp.831～p.836に、それぞれ、パリ・オリンピックとは別建ての独立した記述が成されている。

後者のうち、「一般大衆への情報サービス」¹⁵⁾という項に「冬季大会向け取材メディア（La Presse aux Jeux d'Hiver）」として、国別に報道機関名と記者名とを記したリストがあり¹⁶⁾、日本を含む¹⁷⁾ 14か国から88人が取材に訪れたことになっている。これらの社名には、地元グルノーブルのスポーツ紙「レザルプ・スポルティブ（Les Alpes Sportives）」や、1826年創刊で現存するフランス最古の日刊紙「ル・フィガロ（Le Figaro）」、アメリカのAP（Associated Press）など、明らかに新聞社、通信社とわかるものが多い一方で、ラジオ局らしき名前は一切、見当たらない¹⁸⁾。こうしたメディア企業名から、Presse（英・press「プレス」）という語自体が、今でいう報道よりも狭義の、インクを塗った版を紙に押し付けて（press）転写、印刷する、という語源を反映した語義で使用されていたことがわかる。つまり、この冬季大会に正式取材者としてやって来たのは、新聞を中心とする活字媒体のみであった。第一次世界大戦後の西ヨーロッパで取材メディア（仏*presse* / 英*press*）として認められていたのは伝統的な言論機関である新聞・出版であり、誕生して10年もたないラジオが既存の体制や他メディアからも全く認知されていなかった状

況が浮かび上がってくる。

真冬のアルプス山中に集結した選手約260人と、国内外の取材記者、関係者以外に、大会期間中、現地を訪れた観客が1万人に上ったという記述もある。さらにもう一つ、忘れてならないのが、フランス・オリンピック委員会の要請を受け、首都パリから駆り出された50人近いP.T.T.（Poste, Téléphone et Télécommunicationsフランス郵政電信電話省）の技術スタッフの存在である。「電信および電話通信」と題された詳細な報告があり、大会期間中を通じて選りすぐりの技術陣が連日24時間、技術チェックに対応する万全のサポート体制で臨むことになった、とする記述は、「（略）果たせるかな、このような献身的な働きのおかげで、競技の進行につれ、ある時間帯に集中するなど時にどれほど負荷がかかる状況下でも、送信業務は支障をきたすような中断を生じることなく、ニュースは世界中に打電された。1924年1月25日から2月5日までの期間中、電報総計2,146本、単語数にして292,392語に及ぶ原稿が世界中に送られていったのである」と締めくくられている¹⁹⁾。大会公式報告書は、メディア受入れ体制に関するこの記述の最後に、通信施設が集中するスケートリンクの建物の雪の積もった出入り口付近にP.T.T.職員らが一堂に介した記念写真を大きく掲載している²⁰⁾。

4. ラジオとオリンピックの出会い

～1924年パリ・オリンピックに向けて

天候にも恵まれ、シャモニー「冬季大会」は成功裏に終わった（この時点で、まだ正式にオリンピックと呼ばれていなかったのは、前述の通りである）が、3か月後には、さらに大舞台であるパリ・オリンピックの開幕が迫っていた。両大会を仕切るフランス・オリンピック委員会にとって、冬季大会が“導入テスト”だとすると、パリ・オリンピックは失敗の許されないイベントであった。というのも、当時のIOC会長、クーベルタン男爵（Pierre de Frédy, baron de Coubertin, 1863-1937）が、翌25年での引退を早々に宣言

し、最後の花道として1924年オリンピックをわざわざ自らの活動拠点、パリに再来させる²¹⁾という念願を叶える形で、招致を成功させた経緯があったからである。

それだけに準備は、短期間ながらも周到に行われた。事前広報委員会は週1回、『1924年パリ・オリンピック・ニュースレター (Bulletin des Jeux Olympiques de Paris 1924)』を3ヶ国語(仏・英両語にスペイン語もしくはイタリア語)で発行し、各国NOC(オリンピック委員会)や競技団体に加え、新聞一般紙、スポーツ紙、通信社といった活字メディアに送付した。では、ラジオ放送メディアに関してはどうか。事前広報委員会は、「ここに空(エア)を通じての広報ルートを加えよう」と述べている²²⁾。つまり、オリンピックの起源や歴史、その社会・教育・国際的価値、大会施設などに関する、いわばオリンピックのよもやま話を折にふれ、話題として取り上げ、4ヶ国語で国营ラジオ局(パリP.T.T.ラジオ局)から放送するというのである。

冬のシャモニー・オリンピックからパリ・オリンピックまで僅か半年弱の間での、このフランス・オリンピック委員会の、ラジオ放送メディアに対する態度の軟化は、これに対する評価の変化が反映されたものだと考えられよう。第3章で後述するように、ラジオ放送の伝播力と同時に、ラジオ放送に対する国や社会の認知度もまた、シャモニー・オリンピックからパリ・オリンピックへのはざまに当たる、この1924年初めから半ば頃にかけて急速に上がり始めていた。だからこそ、フランス・オリンピック委員会も、広く一般大衆にオリンピックの価値を啓蒙する「広報メディア」としてのラジオの存在を存分に利用するに値すると判断し、ラジオの活用を積極的に取り入れたものと考えられる。実際、事前広報のみならず、オリンピックの全競技結果もまた、国营ラジオ局を通じて放送されたのである²³⁾。

しかし、その一方でラジオが、新聞のように情報を独自に取材して報じる「報道メディア」として認められる気配は未だ全くなかった。パリ・オ

リンピックに於ける取材申請が受理された報道陣は43ヶ国から724人、うち実際に取材を行った685人の中に、ラジオ関係者は一人として見受けられなかった²⁴⁾。

ここで、メディア関連としてもう一つ、特記しておきたいことは、パリ・オリンピックには、映画の制作関係者も参加していたという事実である。彼らが報道陣の扱いを受けていなかったのは、ラジオの場合と同様である。しかし、ラジオとは全く異なり、彼らはフランス・オリンピック委員会直属のスタッフとして位置付けられていた。リュミエール兄弟(兄Auguste Marie Louis Lumière 1862-1954、弟Louis Jean Lumière 1864-1948)が、パリで世界初の映画を現在のような形で劇場上映した1895年末から約30年、同じパリで開催されるオリンピックを映像記録として残すほか、大衆の啓発や今後の宣伝のためにも、映画撮影は必須である、とフランス・オリンピック委員会が考えていたからである。交渉先をめぐる紆余曲折を経て1922年11月、「スポーツ映画社」が独占撮影権付きの受注契約をフランス・オリンピック委員会との間で交わし、シャモニー、パリ両オリンピックの記録映画を計2本、立て続けに製作した。大会期間中は最大10クルーが場内で撮影に当たり、使用されたフィルムが総計4万メートルに達したという記述がある²⁵⁾。活字でなく、意図して映像でのオリンピックのスポーツ記録を製作すべく、ここまで膨大な撮影素材を集めていた事実は、特筆すべきである。

1924年、フランスで開催されたシャモニーとパリという二つのオリンピックでは、新聞、通信社の活字マス・メディアが取材に訪れていた事実が確認された。また同時期にラジオという音声によるマス・メディアも、オリンピックの啓蒙という役割を担っていたことで、放送とオリンピックとの接点が見出された。次章では、オリンピックのラジオ放送が開始されるまでの過程に於いて、当時のメディアがどのような発展を遂げ、またそれを受容する社会がどのような状況にあったのかについて明らかにする。

2. ラジオが根付いたヨーロッパの社会情勢

1. 軍事無線からラジオへ：

エッフェル塔と無線通信の父、フェリエ

ラジオというマス・メディアの定着状況を、フランスとイギリスの両国を中心に見ていく。

前章のシャモニー、パリの二つのオリンピックを2年後に控えたフランスでは1922年2月6日、パリのエッフェル塔に誕生したフランス初の「エッフェル塔ラジオ局」で定期放送が始まった。しかし元来、エッフェル塔は放送を目的に建てられたのではなく、フランス革命100周年を記念して1889年、パリで行われた第4回万国博覧会のシンボルとして建造されたものである。これは、ニューヨークにクライスラービル(319m)が完成する1930年までの間、世界一の高さ(312.3m²⁶⁾)を誇った。しかし、当初から評判は芳しくなく²⁷⁾、建設も20年間のみ使用という条件付きで認められていたため、1909年には解体されることになっていた。

ところが、その命運を違え、「鉄の貴婦人」を救い出そうとする紳士が現れる。フランス無線通信の父、フェリエ(Gustave Auguste Ferrié 1868-1932)である。無線といえば、1895年の無線実験の成功を機に、イタリアから母の祖国イギリスに渡り、その開発と実用化により世界中に名を馳せることになるマルコーニ(Guglielmo Marconi 1874-1937)の名が浮かぶが、フェリエは、そのマルコーニとともに1899年、英仏無線開発委員会の一員としてドーバー海峡を挟んだ英仏間での世界初の国際無線通信の共同研究を成功させている。フェリエは、理工系エリートを養成する軍所属の高等教育機関²⁸⁾を卒業後、軍の技術者として無線の研究を続けた。フランスに於けるこの分野の第一人者は、パリで一番背の高いエッフェル塔のてっぺんにアンテナを立て、塔全体を巨大な軍事用無線発信基地に転用しようと思いついたのである。この妙案のおかげで、エッフェル塔は「国防上の重要建築物」の指定を受け、存

続が決まった。エッフェル塔ではこの間、1898年に初の無線実験が同じフランスの科学者デュクルテ(Eugène Ducretet 1844-1915)によって行われている。同僚のロシア人科学者、ポポフ(Alexander Stepanovich Popov 1859-1905)が塔から送信した無線を4km離れた霊廟パンテオンで受信することに成功したのである。

ところで、20世紀後半にマス・メディアの王座を獲得することになるテレビの正式名称、「テレビジョン」は、ギリシャ語源の「遠く離れた」を意味する接頭辞のteleに、ラテン語の「見る」を表すvisioという語が付いた造語で²⁹⁾、もとはフランス語である。この言葉は、1900年8月にパリで開かれた第5回万国博覧会の付設イベントの一つ、「静止画伝送のための国際電気大会議」³⁰⁾の席上、ロシアの科学者、ペルスキ(Constantin Perskyi 1854-1906)によって初めて使われた³¹⁾。一方、この同じ会議でフェリエは「無線電信の現状と進歩(L'état actuel et les progrès de la télégraphie sans fil)」と題した研究発表を行っている。Radioはラテン語で「放射」、「光線」を意味するradiusが変化した語で、radiotelegraphy(無線通信)の短縮語形を起源とする。電線ではなく、電波を用いて、まずは声や音そのものでなく、符号によって通信を行うことを意味していた。送信機の送信周波数と受信機の最大感度の周波数を一致させることにより、通信能力をどこまで高められるかが、当時の最大の課題であった。このような無線に関する実践的な研究とともに、その無線による符号、さらには音声の送受信というラジオの機能を既に前提とし、そこに映像まで加えた将来のテレビに言及する発表が、万博の付設イベントで行われたのである。しかも、1900年第2回パリ・オリンピックも同じ付設イベントという位置づけで、同時期に開催されていたとする事実は、放送メディアとオリンピックとの関係を原点から考えるうえでも、非常に象徴的である。1928年に成立した国際博覧会条約(BIE条約)第1条に定義される「博覧会とは…(中略)文明の必要とするものに応ずるために人

類が利用することのできる手段又は人類の活動の一若しくは複数の部門において達成された進歩、若しくはそれらの部門における将来の展望を示すものをいう³²⁾という内容がまさに先立って成されていたとの認識を改めて強くする。

この発表の3年後の1903年、フェリエはエッフェル塔を建設したエッフェル自身の許可を得て、塔の先端に無線用アンテナ、そして3階部分（高さ276m）に発信機を設置し、電波の到達距離を当時の400kmから、10年後の1913年には6,000kmにまで伸ばすことに成功する³³⁾。この間の1907年には640km離れた地点にいる人に向けて音楽を提供する「ラジオ実験」が行われ、1910年にはついにエッフェル塔に無線局が誕生することになった。これらの動きは全てフランス軍の無線通信網の整備と改善の一環として、フェリエの指揮下で行われたものである。したがって無線局もフランス軍の所管（国営）で、当初は仏海軍船舶向けの発信局が、塔南側の地下に置かれていた。1914年に描かれたとされるエッフェル塔の絵は、一番上の先端の部分から太い電線が6本、地上まで張られた異様な姿を晒している³⁴⁾。

第一次世界大戦が勃発し、対独軍事無線通信傍受アンテナが取り付けられた。フェリエは、ドイツ軍の暗号解読にも技術的側面から貢献したほか、1万台以上の軍用無線受信機の製造も統括するなどの功績が認められ、大戦終結後に新設された軍事電信総監理局（l'Inspection générale des télégraphies militaires）のトップに就任し、その後も軍民を問わず、ラジオを含む電波無線通信の発展に貢献した。

フェリエの後押しにより、まず国営「エッフェル塔ラジオ局」が誕生した。1921年11月に初の試験放送を行い、12月24日からは一日30分間の定期放送に踏み切った。気象情報、ニュースと少々のバイオリン演奏という内容だった。翌1922年2月6日にフランス初のラジオ放送局として正式開局すると、番組構成は音楽番組に傾いていく。当時、レコード自体は既に存在していたが、まだプレーヤー（再生機）が希少だったため、ポ

ランティアのオーケストラや歌手をスタジオに招き、その演奏を生放送した。番組名は「ラジオ・コンサート（Radio-Concerts）」。ニュース番組は「話す新聞（Journal parlé）」と名付けられた³⁵⁾。

フェリエはこのように戦時中の軍事利用にこだわらず、平時には無線を大衆の娯楽、つまりラジオ放送のために開放することに心を砕き、この国営局に次いで新しく民間ラジオ放送局「ラジオラ（Radiola）」を開くことにも尽力した。エッフェル塔のふもとは、そのような功労を称える彼の像が立っている³⁶⁾。

2. ラジオと王室～BBC

ラジオ黎明期の欧米の情勢のうち、フランスを除くと、第一次世界大戦の戦禍を免れたアメリカに大きな動きがあった。1920年11月、ペンシルベニア州ピッツバーグに世界初の民間ラジオ局KDKAが誕生したのである。折しも大統領選挙の投票日³⁷⁾で、その開票結果速報に始まる本格的な定時放送がスタートし、翌1921年、ボクシングの世界ヘビー級王者ジャック・デンプシー（Jack Dempsey, William Harrison Dempsey 1895-1983）が、フランスのジョルジュ・カルパンチエ（Georges Carpentier 1894-1975）をニューヨークに迎えて行った3度目のタイトル防衛戦が、米国における初のラジオによるスポーツ生中継になった³⁸⁾。

一方、ヨーロッパではそれより一足早く1919年には、オランダのハーグで一日3時間の定期放送を手掛ける局（Nederlandse Radio Industrie）が登場した³⁹⁾。先述の通り、フランス初の国営エッフェル塔ラジオ局のスタートは1922年2月だったが、イギリスではその約3か月後の1922年5月11日、ロンドンのマルコーニ社（Marconi House）7階スタジオから不定期ながらも週1回30分から1時間の放送が始められた。次いで「イギリス放送会社（British Broadcasting Company）」としてのBBC設立⁴⁰⁾（1922年10月18日）を経て、11月14日には毎日の定期放送（ニュー

ス・天気) がスタートした。このように第一次世界大戦後のヨーロッパでは、ラジオ放送の実用化に向けて各国の鎬を削る戦いが繰り広げられていたのである。

ここでBBCが着目したのは、英国民の関心の極めて高いテーマ、即ち、お天気、王室、そしてスポーツであった。定期放送初日から気象情報は番組に組み込まれていたが、英メディアは王室との関係でも長年、王室と国民とを直接つなぐ重要な役割を果たしてきた。19世紀後半に雑誌や新聞の活字メディアが誕生した際、大英帝国に君臨していたヴィクトリア女王 (Victoria 1819-1901) は、ことあるごとに写真や肖像画が掲載され、人気が高まった⁴¹⁾。通信社からは王室担当記者が選出された。

20世紀に入り、北ロンドン郊外のウェンブリー (Wembley) で1924年から1年間、開催された大英帝国博覧会 (British Empire Exhibition) の閉会式 (1925年) で、ヨーク公アルバート王子 (のちの英国王ジョージ6世) がマイクを前にスピーチを読み上げようとし、思いきり吃って大失敗してしまう『英国王のスピーチ』事件が起きた⁴²⁾。これは、もはや君主といえども、新しいメディアがもたらす威力の外に逃れていられなくなったことを示している。大衆の前に立ち、威風堂々たる姿さえ見せておけば、声や話し方になど特段の配慮も要らない時代は、過去のものとなった。偶然にも、音声メディアのラジオが瞬く間に発展する20世紀に生まれてしまったことにより、国王としてそれらのメディアを介して直接、大衆に伝えるべき要素をどう制御、演出するかにまで考えを巡らせることが、発信者としての義務になっていった。そういう時代へと、メディアが変えていったのである。さらに、映像メディアのテレビが加わると、この状況は一層、顕著なものになっていくのである。

新しいメディアが根付いていくに当たっては、必ず世の中の変化を前提にし、社会におけるポジションの模索と確立を目指す営みが重視される。新聞、そしてラジオというメディアも、日々の暮

らしの中で国民が関心を寄せる話題を意識して伝える中から、社会により早く、広く認知、歓迎されるようになっていったのである。メディア産業の興った19世紀後半から20世紀前半のラジオの時代にかけて、その国民的関心事が、イギリスでは特に王室とサッカー、王室のないフランスやアメリカでは、オリンピックを含めたスポーツになっていくのである。

メディアが社会に認知されると、次に動き出すのは決まって国家である。なぜなら、国家は、そのさらなる発展を目指し、己の威光を投影するために今、最も勢いのあるメディアを敏感に選び取ろうとするからである。国家は、これまで全くなかった新しいメディアへの取り組みを通じて、国家としての「力」の表現の獲得と、その社会への浸透を図っていくことになる。このように、あるメッセージがメディアを通じて国民の一人一人に至るまで伝えられる仕組みが構築されていく。その新しい枠組みの世界の中で、国民が、やがて国家や国王に対して、さらなる支持と敬愛の念を捧げるようになる仕組みが完成すれば、国家の繁栄が確実に保障されることになるからである。

また、メディアが社会的に認知され、国家のメディア戦略が現実化される時点になると、それまでは全くの黒子で尊敬の対象にもなり得なかったメディアそのものも、日の目を見るようになり、存在感を高めるとともに、社会の信頼を受けるようになり始める。音声、そして映像という、受け手の感性に直接、訴えかける情報データを20世紀のメディアが自在に操りながら表現していくプロセスを獲得する努力は、あらゆる場面を通じて行われていくことになる。その一例としてBBCは、「王室」と「国民の関心事」に徹底的に寄り添って伝えていく決意を持ち続けることを通じて、大英帝国に不可欠なメディアとして成長を遂げていく道筋を見出すことが出来たことが確認されよう。そして、英国でもサッカーに限らず、やがてはスポーツそのものが大きな「国民の関心事」になっていくようになる。

3. BBCとスポーツ

英国BBCが初めて放送した国王のラジオ演説は、先の大英帝国博覧会の開会式（1924年4月23日）でジョージ5世が行ったスピーチであった。映画『英国王のスピーチ』は、その開会式の際のエピソードだったが、これを行ったヨーク公アルバート王子はジョージ5世の次男である。その頃、ドーバー海峡を隔てたフランスでは、いよいよパリ・オリンピックが始まろうとしていた。イングランド・サッカー協会（Football Association, 以降FAと示す）にも参加を促す知らせが届いていたが、FAは「リーグ戦とカップ戦で忙しいから」として、すげなくこれを断っている。フランス肝煎りの大会に出たくないからというよりは、むしろ英国内だけでサッカーが十二分に盛況だったため、オリンピックに関心を向ける余地がなかったことによる措置と考えられる。20世紀前半のイギリスは、サッカー発祥国としての自負もあり、国際スポーツの世界では孤立主義に傾ききらいがあった。しかし、そうした態度に出て尚、自己完結できてしまうほど、当時の英国の近代スポーツを巡る枠組みとスケールは、他の国々の場合と比較するまでもなく膨大であったのである。

『英国王のスピーチ』の舞台となった旧ウェンブリー・スタジアムは、大英帝国博覧会の会場に間に合うように1年前倒しして1923年4月に建てられ⁴³⁾、当初は「帝国競技場（Empire Stadium）」と呼ばれていた⁴⁴⁾。完成して間もなく、まずはサッカーのFAカップ決勝が開催された⁴⁵⁾。詰めかけた推定20万人の観客は、ボルトン・ワンダラーズFCがウェストハム・ユナイテッドFCを2対0で下す瞬間を目の当たりにし、興奮のつぼと化したのである。この試合は、開始前にスタンドからピッチまで入場者があふれ、試合開始が危ぶまれた際に、騎馬警官がピッチにまで出動し、観客を誘導して辛うじて試合が出来るスペースを確保した。試合のキックオフは45分遅れた。しかし、このような状況下で始まったにもかかわらず、死者や大きな怪我人も奇跡的に

出なかったため、この試合は「ホワイト・ホース・ファイナル（白馬の決勝）」と呼ばれるようになった。このようなスポーツの熱気と人気とを、BBCがラジオの実況生中継に取り込むまでには、まだあと3年の歳月が必要だった。

1927年1月15日、ラグビーの聖地、トゥイッケナムからイングランド対ウェールズのテストマッチがラジオで初めて生中継された。そして、翌週1月22日の1部リーグのアーセナル対シェフィールド・ユナイテッド戦からサッカーの生中継が始まった⁴⁶⁾。ピッチのどこに今、ボールがあるのか、リスナーにもわかりやすく伝えられるように、BBCは週刊番組誌「ラジオ・タイムズ（Radio Times）」にピッチの絵を載せ、碁盤の目のように切り分けると、それぞれの正方形に番号を振った。実況では、その番号によりボールの位置を表現した。この1927年には春以降もFAカップ決勝、クリケット、ウィンブルドン・テニスなどのイベントが目白押しで、堰を切ったようにスポーツがラジオで伝えられる時代が到来した。

国内のスポーツ生中継が増えていく一方で、イギリスではオリンピックのラジオ中継を手がける動きがなかなか出てこなかった。国民が4年に一度しかやって来ないオリンピックより、熱いシーズンを毎年、楽しめるサッカーやラグビーに夢中だったからだ。BBCが初めてラジオ放送を行ったオリンピックは、1928年アムステルダム・オリンピックであった⁴⁷⁾。

シャモニー、パリ両オリンピックの記録映画製作については先述したが、イギリスでもオリンピックを映画に残す取り組みが、実はフランスより15年以上前から行われていた。1908年第4回ロンドン・オリンピックも、この年のロンドン万国博覧会の付属大会としての位置付けであったが、主会場のホワイトシティ・スタジアムの貴賓室の様子や、体操、陸上（含マラソン）、水球、アーチェリーなどの競技と表彰式の映像が存在し、その一部は現在、ネット上でも閲覧可能である⁴⁸⁾。撮影したのは、19世紀末からパリで音声収録や映

画撮影会社として知られていたパテ (Pathé) 社である。世界初の映画を手掛けたリュミエール兄弟 (前述) とも取引をするなど商才に長け、早くも1902年にはロンドンに進出すると、「パテ・ガゼット」というニュース映画を作るとともに、その上映映画館も多数設ける一方で、1908年ロンドン・オリンピックの記録映画製作の受注にも成功していたのである。

そして、ラジオという新しい放送メディアも、生き残りを図るためには、リスナーである国民の関心事に徹底して寄り添うことが不可欠だと時代の風を確実に感じ取っていった。音声による同時性という、活字メディアにはない特性を活かす形でラジオが獲得した主要テーマは、イギリス固有の王室である。もう一つが、すばやい展開変化を正確に伝えることが可能なスポーツである。近代スポーツ発祥国のイギリスでは、サッカーやラグビーなどの競技に毎シーズン、人気が集まると先述したが、一方で近代オリンピックの父、クーベルタンの祖国であるフランスでは、特に国を挙げてこのイベントに権威づけしていこうとする動きと相まって、オリンピックはラジオ放送を介して人々の熱狂を勝ち得ていくことになる。

3. オリンピック放送の起源

1. フランスにおけるラジオ放送

BBCラジオの設立、放送開始とほぼ同時期の1922年11月6日、パリに誕生した初の民間ラジオ放送局の名前は、「ラジオラ (Radiola)」である。フェリエの発案で第一次世界大戦前に生まれ、軍の管理下に置かれた国営無線局の系譜を受け継ぐ国営エッフェル塔ラジオ局が同じ1922年の2月に放送を開始していたのに対し、ラジオラは民間放送局で、当初はパリのみで聴取可能だった。前者が、敵国軍無線傍受など諜報的活動も含めた国の拠点としてのイメージからなかなか抜け切れず、変化に乏しい番組編成で人気が上がらなかった一方で、それに挑むかのようにラジオラは、音楽の合間に軽妙なトークをつけたり、ラジオドラマといった新しいジャンルを開拓したりし

始めた。

フランスでは、既にラジオ局が出現を見た1922年から、これを管理するP.T.T. (郵政電信電話省) が国営、民間のどちらにも放送の方向性を定めきれないまま、取り敢えず各1局ずつに免許を与えていた。そして、翌1923年1月には本来、指導する立場にあるP.T.T.自身が傘下の理工系グランゼコールに国営の「パリP.T.T.ラジオ局」を作らせたのである。首都を拠点にいわば官報の類を放送させる間に、P.T.T.は国内各地にさらに国営局を増やし、1930年代にかけてラジオによるネットワークを整備しようとしていた⁴⁹⁾。第1章で見たパリ・オリンピックの事前広報と競技結果を伝える役目を果たしたのは、同じ国営でも、フェリエ主導によって最初に出来たエッフェル塔ラジオ局ではなく、通信行政を取り仕切るP.T.T.肝いりのパリP.T.T.ラジオ局であった。パリ・オリンピックのほぼ半年前までのフランスに於ける放送メディア状況は、以上のようなものであった。

生まれたばかりの民放局ラジオラが、意欲的に番組制作に取りかかる中でさらに新規挑戦に値する分野だと判断し、力を傾注し始めたのがスポーツだった。1924年3月22日土曜日の番組編成を見てみよう。午後8時30分放送開始の夜の情報番組の中の一コーナー、「ラジオコラム」で取り上げられていたのは「自動車、飛行機、そしてスポーツ (Auto, aéros et sports)」である。既にこのころから週末のスポーツは定番メニューになっていたことがうかがえる。

ラジオでのスポーツ生中継放送が可能になると、リスナーは観客としてスタジアムに足を運ばなくても、ラジオ聴取によってスポーツ観戦が可能になる事態が生じるに至る。つまり、余暇の過ごし方に新しい形態が生まれたといえよう。このスポーツ聴取という新たな余暇の過ごし方を提示するため、ラジオ放送に不可欠な要素は、実況にもまして現地からの生の (騒) 音である。試合展開そのものと同時に、観衆が示す興奮やリアクションを「音」で伝えることの重要性は決定的であった。プーイングで床を足で踏み鳴らすのか、

隣との会話もままならないほど拍手喝采しているのか、その場の雰囲気こそっくり音で届けることが求められていた。聴覚メディアとしてのラジオの特性を生かし、放送現場ではオリンピックに向け、臨場感あふれる「音」について議論されていたと考えられる⁵⁰⁾。

1923年10月6日、ラジオラは、フランス人のボクシング世界フェザー級チャンピオン、クリキ (Eugène Criqui 1893-1977) の世界タイトル・マッチをパリ市内のワグラム公会堂 (Salle Wagram) から生中継で放送することになった。アメリカに遅れること約2年、フランスのラジオ史上初のスポーツ生中継が実現することになったのである。この時のラジオ実況担当、エドモン・ドゥオルテルは、どんなことに気を付けて話すつもりかと尋ねられ、こう答えた。「ラジオブースだけでなく、街中でどんなことが起きているかにリスナーが立ち会えるようにするのが、面白いんだよね。」⁵¹⁾

明らかにシャモニー・オリンピックの3か月前の時点で、ラジオによるスポーツの生中継は開始されていたのである。そして、ラジオ初のオリンピック生中継は1924年のパリであった。それでは、ラジオ局は取材申請も出さずに、パリ・オリンピックの生中継を行ったのだろうか。仮にそのようなことが可能であったとしても、中継クルーらは、許可もなくオリンピック会場のいったい、どこに身を置き、何の競技について、どのような実況生放送を世の中に送り届けたのだろうか。

2. 空からのスポーツ実況

～飛んでる「匿名リポーター」氏

1923年10月のボクシング生中継の実況担当として白羽の矢が立ったのが、エドモン・ドゥオルテル (以下エドモン) である。このクリキの試合を生中継したエドモンは、ラジオラが新スポーツ番組付で募集、採用したフリーのリポーターである。実はこの試合の5か月前の1923年5月、スポーツの開拓に情熱を傾けるラジオラは、同じパ

リ市内で行われる別のボクシングの試合⁵²⁾で初めての生中継をP.T.T.に申請していた。しかし、役所は頑として中継用回線の許可を出そうとしなかった。まだ何の実績もない、得体のしれないラジオ放送局に対して、稀少な公共電波を国が与えるなど、とんでもないとの判断からであった。そこで、ラジオラは別の方法を編み出した。リングサイドで観戦するエドモンが実況するそばから、その一言一句を速記者が書き取り、1ラウンド分ずつ、電話を通じてラジオ局で受ける担当者に原稿として聞き取らせたいものを、マイクの前でスタンバイするアナウンサーに渡して読ませるといふ、準実況風、或いは疑似中継の形で、ボクシングの試合を伝える放送が成された。これが図らずも、後に実況も含め、「ラジオ・レポート」と呼ばれるようになる、現地から伝えるスタイルの原型である。つまり、エドモンが確かに現地で“実況レポート”したその原稿を、この時は、ラジオ局で他のアナウンサーが後から読んで伝える形で放送に漕ぎつけたのである⁵³⁾。

この“実況”が翌日来、パリ中で話題を呼んだ。また、こうした手法で実況し、リスナーを大いに引き込んで見せたラジオラの熱意と実績を前に、P.T.T.は10月の試合で再びラジオラから出された回線申請を許可しない理由がなくなってしまう。このような紆余曲折を経て、フランス初のスポーツ生中継放送としてのクリキ戦が実現したのである。このクリキ戦の前に、エドモンは観客席を突撃し、客同士の会話を報じたり、その場でぶっつけインタビューを行ったりしてから、実況に入った。これにより、ラジオの前にいるリスナーもまた、会場の観客と同様に試合開始前から臨場感と興奮を共有できる仕組みが、「音」によって組み立てられた。こうして、スポーツの生中継実況が果たされ、番組全体を盛り上げたのである。クリキ戦生中継を通じて活躍したエドモンは、局の奇抜な方針により、放送では自分の本名を一切、明かさずにニックネームで通した。その方が聞き手にとっては話が謎めき、否応なく興味がそそられ、巷の話題にも上りやすいからであ

る。「匿名リポーター」⁵⁴⁾と呼ばれる理由がここにある。

以下は、フランスの様々な資料を参考にし⁵⁵⁾、事情を整理したものである。5月の試合は会場から局までの生中継回線が確保できなかったため、エドモンが行った実況内容が活字原稿に起こされ、電話で局に伝えられて、それを局内のスタジオで別のアナウンサーが読む形で放送された。しかし、このクリキ戦は真正正銘、「匿名リポーター」による現場からの実況生中継であり、これは試合翌日にパリ中で大評判を呼んだ。ラジオラでは、これを機にさらに様々なスポーツの現場に、エドモン登板の機会を広げていった。翌1924年がオリンピック・イヤーだということを十分に意識したうえでの決定であった。サッカー、ラグビー、そして年が改まる1924年1月25日からは、初の冬季オリンピックがシャモニーで始まる…。プランツが自らのサイトで述べている「数多く行われていた」スポーツのレポートとは、全てエドモンの仕事である⁵⁶⁾。シャモニー冬季オリンピックの取材許可を得たラジオ局が皆無であることは先に説明した。ゆえに、自らのレポートスタイルを確立し、上がり調子のエドモンが、例のぶっつけ本番方式でシャモニーにも突撃していったのではないかと推測されるが、これを証明する資料は残念ながら見つかっていない。また、プランツをはじめとするラジオ研究家の間でも、エドモンのシャモニー・レポートを「聞いた」という人は見つかっておらず、「『聞いた』と話している人がいた」という間接証言しか得られていない。ただ、ありもしないのに、わざわざ「聞いたという人がいた」と話を作る必然性もないとすると、シャモニー・ラジオ・レポートは、おそらく存在したのではないかとするのが現段階での推論である。

エドモンを抜擢したのは、ラジオラ編成局長のモーリス・ヴィノ (Maurice Vinot 1882-1969) であった。彼は技術畑の出身ながら、芸術も含め、様々な分野に造詣が深く、ラジオラに招聘されると、ラジオ・ニュースという全く新しい形式

の番組を編み出した。中でも特に現場レポートを重視し、これを生かすために不可欠な「中継車」の生みの親としても知られている人物である。このような新しいアイデアと機材とを放送の世界に次々に投入し、それまでになかった高揚感あふれる番組のスタイルを作り出した。それを具現化させるうえで最適な相棒の役割を果たしたのが、フランス初のスポーツ実況リポーター、エドモン・ドゥオルテルだったのである。

それでは夏のパリ・オリンピックについては、彼らはどのような健闘を果たしたのか。こちらに関しては冒頭でも述べたように、IOCの公式記録にもエドモンの名前は登場する。しかし残念ながら音源は存在しない。エドモンを始めとするラジオ取材班に、フランス・オリンピック委員会から正式な取材許可が下りることはなかった。突撃スタイルで既に市井の人気を博していた彼らが、最後まで報道陣リストに載らなかった理由は何か。それは、この頃になって、ラジオという新しいメディアの影響力を実感し、脅威さえ覚え始めた旧来の活字メディアのジャーナリストたちが、あのようなものは色物だとして排除すべく、フランス・オリンピック委員会に取材許可を出さないように掛け合い、参入に規制と制限をかけていたからだ、とのラジオ研究家の説がある⁵⁷⁾。これもあながち、あり得ない話ではないだろう。以下も引き続き、ラジオとパリ・オリンピック生中継の顛末について、様々なラジオ研究家が公表している言説を垣間見ていこう。

組織委員会からも、他メディアからも、オリンピック会場内に入ることを固く禁じられたエドモンたち取材班は、次の一手を講じた。大会期間中、スポンサーの自動車メーカー、プジョー (Peugeot) がPRのため、会场上空に気球を飛ばすことがわかったからだ⁵⁸⁾。エドモンは、メーカーの担当者と幹部に自分も乗せてくれるように交渉した。フランスで発行されている放送専門雑誌には、エドモンが、まさにパリ・オリンピックの主会場、コロンブ・スタジアムで、これから気球に乗り込もうとする写真が掲載されている⁵⁹⁾。

ちょっと太目の体型にメガネ、特徴のあるカンカン帽をかぶり、籠の中から笑いかけているものだ。この頃には、「匿名リポーター」のスポーツ・リポートは、リスナーの間でもすっかりお馴染みで、エドモンは行く先々で、「よっ、匿名リポーター！」と声を掛けられるようになっていたという。6月9日、オリンピック・サッカー決勝。ここまで破竹の勢いで勝ち上がってきた南米初参加のダークホース、ウルグアイがスイスと相見える頂上決戦も当然、立ち入り禁止。それならば、上空から見下ろしながらリポートすればいいと、頼みの気球に乗り込んだエドモン。しかし、ここで思わぬハプニングが起きる。何と、浮き上がった空には強い風が吹いていて、エドモンの乗った気球は会場のコロンブ競技場とはみるみる違う方向へと流されていくではないか。エドモンは試合の実況とともに、自分の流されていく状況も入れ込みながら、どんどんリポートしていく。聞いている方は、試合の展開もさることながら、空飛ぶ「匿名リポーター」の行く先についても、いたく興味をそそられ、ますますラジオ放送に耳を傾けることになる。エドモンは自分が空を飛ばねばならなかった本当の理由についても、リポートにしっかり盛り込んだ。

上記の「匿名リポーター」のエピソードは、既成の権威が新たに台頭しつつあるものを己の足元をも揺るがしかねない脅威に感じるからこそ、無視、拒絶しようとしていた事実を示していると考えられる。しかし、そのことが皮肉にも、ラジオのリスナーとエドモンとの間の心理的な距離をさらに縮める方向に働いていくことになった。「聞いてよかった」とリスナーが満足できる内容を伝えられるならば、最後にそのリポートがどのように締め括られたのかなど、詳細を覚えられていなくても一向に構わないのである。このように、「匿名リポーター」の届ける放送リポートは、社会をも巻き込み、スポーツを伝えるメディアとして、ラジオが確固たる地位を固めることになっていく事情を示している、と考えられるのである。

エドモン自身も、この空中リポートでますます

人気を博し、スポーツ・リポーターとしての地位を確立していった。しかし2年後の1926年、P.T.T.が民放に対して再び、電話回線の中継使用許可を出さなくなった⁶⁰⁾。このことにより、エドモン・リポートは実質、成立不可能に追い込まれた。彼は2年後の1926年に国营パリP.T.T.ラジオ局に移籍することとなり、その後も30年代にかけてP.T.T.が積極的に開局を進めたローカル局に移り、制作者の求めに応じて随時、スポーツの現場から中継マイクの前に立ち続けたのである⁶¹⁾。

おわりに

本稿では、1924年にオリンピックと出会ったラジオ放送を例に、関係者が巻き込まれた様々な戸惑いや、今となっては、時に笑いさえ誘うような状況を通じて、当時、全く新しいメディアであったラジオが社会に受け入れられていく過程を明らかにし、スポーツ史に於けるオリンピックと放送の位置付けについて考察を加えた。第1章では、マス・メディアがオリンピックについて報じるに至る経緯を明らかにした。次に第2章では、ラジオと言う新しい放送メディアを迎え入れるに至った欧米、なかんずくフランスとイギリスの受け止め方について考察した。さらに第3章では、ラジオが初めて本格的に出会ったパリ・オリンピックに関する問題を取り上げた。具体的には、これまで日本で注目を集めることのなかったフランス初のスポーツ・ラジオ・リポーター、エドモン・ドゥオルテルの活躍を紹介し、ラジオとオリンピックとの関係性を明らかにした。上記の考察をもとに、オリンピックと放送との豊かな関係性、即ち、両者が互いに相乗効果を生み出し、いかにして大衆を巻き込み、熱中させてきたかという、スポーツと放送との関わりの歴史が浮き彫りにされたと言えるだろう。

しかし、これは決して過去に限ったものではない。特に放送の分野に於いては、2012年ロンドン・オリンピックが、初のデジタル五輪と称されたように、ネットとの関係性についてどのように折り合いを付けていくのかという課題が、オリ

ピック放送を契機として、21世紀の今後の放送の在り方全般をも規定する大きなテーマとして浮上し、立ちはだかっている。これに関しては、ホスト・ブロードキャスターの英・BBCからも、次のような声が聞こえてくる。「これからは、テレビを見ながら携帯でつぶやきを共有し、タブレットで情報を呼び出す『2スクリーン時代』（中略）視聴者が完璧な主導権を握る時代だ。」（ベン・ギャロップBBC双方向スポーツ報道部長）⁶²⁾ このように、オリンピック放送は今、インターネット、ソーシャルメディアの新しいメディアを通じた配信形態により、再び、新しい夜明けに立ち会っているのである。既にロンドン・オリンピックから2年以上が経ち、高性能携帯電話のスマートフォンが世界的にも急速に普及してくると、このスマホ、タブレット端末、パソコンとテレビとをネットワークで結んでコンテンツを共有する4スクリーン戦略という未だかつて触れたことのないメディアの時代も予感される。1924年のパリで、オリンピックがラジオという生まれたばかりのメディアと初めて出会ったことにより、未知なる放送の世界へと踏み出して行った時のように。

本稿は、当時のラジオ黎明期の熱気に満ちた状況を、初の本格的デジタル五輪としてのロンドン・オリンピックの放送の全体状況に重ねて見ることにより、新しいメディアの創造と誕生の問題、即ち、オリンピックとラジオ放送との関係性というスポーツメディア史の限られた一問題を考察したに過ぎない。したがって、今後の課題としては、旧来の枠を乗り越えて新しく登場するメディアが、社会をどのように変容させていくかという、古くて新しいテーマを、スポーツとメディアとの関わりという視点をもとに引き続き考究し、総合的に考察を積み重ねていくことが必要だと考えている。

注および引用・参考文献

- 1) メディアとは、記号によって表象された情報を生成、発受信、伝達、処理、蓄積、再生する働きを備えた情報伝達手段である。
- 2) 放送とは、放送法第2条第1号により「公衆によつて直接受信されることを目的とする電気通信の送信」と定義され、たとえば放送局などの単一発信者から、不特定多数の受信者に情報やコンテンツを配信することをいう。ラジオ放送とテレビ放送の2種類がある。
- 3) 通信、もしくは電気通信は、電気通信事業法第2条第1号により「有線、無線その他の電磁的方式により、符号、音響又は映像を送り、伝え、又は受けること」と定義される。情報のやり取りが双方向であり、また単一の発信者から、別の単一、もしくは多数の特定受信者に向けてコンテンツが配信される点で、放送とは形態が異なる。放送は公衆に向けた通信の送信で、厳密には電気通信の部分集合を成すが、「放送と通信の融合」というように、並立するものとして扱われるケースもある。不特定多数、公衆を受信者として想定して発信するメディアを、特にマス・メディアと呼ぶ。
- 4) この場合のソーシャルとは、ソーシャルメディアを活用するという意味で、インターネットを介して情報発信する個人同士のコミュニケーションを通じて、いつでも、どこでも、リアルタイムでオリンピックとその関連情報を共有し、楽しめるメディア環境が到来したことを指している。
- 5) IOCオリンピック研究センター（The Olympic Studies Centre）が1896年アテネから1984年ロサンゼルスまでの各夏季五輪について準備、組織、運営の概観をまとめたリストのp.21 Pour la première fois, certains événements sont commentés en direct à la radio par le journaliste Edmond Dehorter. <http://www.olympic.org/Assets/OSC%20>

Section/pdf/LRes_11F.pdf

(最終閲覧2013年6月12日)

- 6) 「オー・ドゥ・セヌ県のアーカイブと歴史遺産 (Archives et Patrimoines des Hauts-de-Seine)」ホームページの1924年パリ・オリンピックのコーナーの文中に、このオリンピックで選手村が初めて登場したと合わせて紹介されている。

Autre nouveauté, la retransmission à la radio permet à un public plus important de suivre les épreuves en direct.

<http://archives.hauts-de-seine.net/archives/histoire-du-departement/moments-dhistoire/les-jeux-olympiques-de-1924-a-colombes/>

(最終閲覧2013年12月12日)

- 7) 英国国立図書館 (The British Library) ホームページより Sport and Society: the Summer Olympics and Paralympics through the lens of social science p.2
<http://www.bl.uk/sportandsociety/exploresocsci/sportsoc/media/articles/revlandmarks.pdf>

(最終閲覧2013年5月10日)

- 8) 「約30年にわたるラジオメディア研究の専門家、ラジオ史に詳しい」とEU (欧州連合) 支援プロジェクトであるEMCO (欧州メディア文化サイト) の著者紹介に写真ともども掲載されている。(生年は本人確認済み)

<http://www.european-mediaculture.org/Radio-et-musique.184+M5a6678b1048.0.html>

(最終閲覧2013年5月30日)

- 9) 「ラジオの百年」のホームページより 20年代のラジオ状況

<http://100ansderadio.free.fr/HistoiredelaRadio/Lesannees20.html>

(最終閲覧2013年5月25日)

- 10) NHKによるベルリン・オリンピックのラジオ生中継は、他の競技でも行われたが、時差

により真夜中の放送となった水泳女子平泳ぎ200メートル決勝は、前畑秀子選手の日本女子初の金メダル獲得とともに、その際の実況を担当したNHK河西省三アナウンサーによる「前畑がんばれ！」の絶叫で有名である。

- 11) 正式地名はシャモニー・モン・ブラン (Chamonix-Mont-Blanc)。

- 12) たとえば1908年ロンドン・オリンピックでは、当時、イギリスで人気の高かったフィギュアスケートが行われるなど、競技採択には開催地の意向が強く反映された。その後、1916年にドイツ・ベルリンで初の冬季オリンピックが開催される予定だったが、第一次世界大戦の勃発により中止された。その後も、1924年パリ・オリンピックを最後に引退を表明していた当時のIOC会長で近代五輪の父、クーベルタン男爵が、「冬季オリンピックは金持ちの俗っぽいお遊びだ」として導入に反対していた。しかし、同じフランス出身のIOC委員、ポリニャック侯爵やイタリア勢などが導入に賛成の意向を示し、実現に至った。

- 13) 16ヶ国から選手258人 (うち女性11人) が出場し、4競技14種目を競った。

<http://www.olympic.org/fr/chamonix-1924-olympiques-hiver>

(最終閲覧2013年5月10日)

- 14) BBCは1932年ロサンゼルス五輪以降にラジオ放送の音源保存を始めたため、24年パリ五輪についても、あいにく録音されたものはない、としている。注7に前掲の英国国立図書館 (The British Library) ホームページの「Landmarks in the history of the media and the Olympics (メディアとオリンピック史の画期的なできごと)」より

<http://www.bl.uk/sportandsociety/exploresocsci/sportsoc/media/articles/landmarks.pdf>

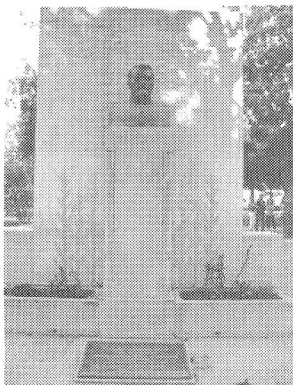
(最終閲覧13年5月29日)

- 15) フランス・オリンピック委員会、『第8回オリンピック大会1924年パリ大会公式報告書』

- (Comité Olympique Français. *Les Jeux de la VIIIe Olympiade Paris 1924: rapport officiel*. Ed., M.A. Ave, Paris: Librairie de France, n.d.) 1924年 p.833
<http://www.la84foundation.org/6oic/OfficialReports/1924/1924.pdf>
 (最終閲覧2013年11月27日)
- 16) フランス・オリンピック委員会、同上書、p.837～p.838 La Presse aux Jeux d'Hiver
- 17) 日本からは、「東京・朝日R. Shiguetokou」と、わずか1名のみの記事がある。
- 18) 唯一、その社名からラジオ局ではないかと思われるようなL'Agence Radio社も、フランスのギリシャ系通信社。この場合のRadioは、無線通信の意。
- 19) フランス・オリンピック委員会、前掲書、p.833
- 20) 同上書、p.833
- 21) 1900年第2回パリ・オリンピックは、同時期に同じパリで開催された万国博覧会の付属イベントとして実施されたため、クーベルタンはこれを大失敗と見なし、引退前にどうしてもイメージ修復を果たしたかった。因みに五輪はその後、第3回1904年セントルイス、第4回1908年ロンドンの各大会までは全て万国博併設。第5回1912年ストックホルム大会で漸く五輪として独立を果たす。五輪のメダル授与も、万博で優れた製品に金、銀、銅のメダルを授与して栄誉を讃える手法を1904年大会から導入したもので、五輪憲章の規定に盛り込まれたのは1907年。
- 22) フランス・オリンピック委員会、前掲書、p.64
- 23) 同上書、p.64 ただし、ここにいう国営ラジオ局は、第3章に出てくるパリP.T.T.ラジオ局である。
- 24) フランス・オリンピック委員会、前掲書、p.806～p.813 日本からはシャモニーに引き続いての東京・朝日のシゲトク氏など7社7人（うち報知からは現地駐在のフランス人かと思われる）。
- 25) フランス・オリンピック委員会、前掲書、p.798
 Les Films Sportifs社が負担する独占撮影権付契約金30万フラン。これに大会終了から2年間の上映・売却収入の10%を当局側に見込むなど、計85万フランの一括払い。
- 26) その後も放送技術の進歩とともにエッフェル塔は“伸び”続け、1957年にはテレビ生放送用のパラボラアンテナが設置されて320.75mになり、2000年には地上デジタル放送向けUHFアンテナ設置により、高さは324mを超えた。パリ市が60%出資するエッフェル塔管理会社（SETE = Société d'Exploitation de la Tour Eiffel）のホームページより
<http://www.tour-eiffel.fr/fr/tout-savoir-sur-la-tour-eiffel/dossiers-thematiques/95.html>
 (最終閲覧日2013年12月12日)
- 27) 着工直後の1887年2月14日付ル・タン紙に芸術家らによる建設抗議文が掲載された。文豪モーパッサンも「ここは、私がパリであのいまましい塔を見ないですむ唯一の場所だから」と、エッフェル塔のレストランでよく食事をした話は有名。
- 28) 専門分野に於けるフランス独自の高等専門学校、グランゼコール (Grandes Écoles) の一つであるエコール・ポリテクニク (École polytechnique) 出身。有能な学生を支配下に置くために1794年、ナポレオンが軍所属として開校し、現在も国防省所管。
- 29) 杉山茂『テレビスポーツ50年オリンピックとテレビの発展』角川書店、2003、p.12
- 30) 第5回万国博のテーマは「過去を振り返り20世紀を展望する」。前回万博の目玉、エッフェル塔にはエスカレータが敷設され、動く歩道など電気関連アトラクションも多かった。地下鉄 (Métro de Paris) もこの機に導入された。注21でふれた1900年パリ・オリンピックもこの第5回万国博の付設イベントで

ある。

- 31) Constantin Perskyi, "Télévision au moyen de l'électricité", in Exposition Universelle Internationale de 1900, Congrès international d'électricité (Paris, 18-25 août 1900). *Rapports et procès-verbaux* publiés par les soins de M. E. Hospitalier, *Rapporteur général*, Gauthier-Villars, Imprimeur-Libraire, Paris, 1901.
A. Abramson, *The History of Television, 1880 to 1941*, McFarland & Company, 1987, p.23.
- 32) 外務省「国際博覧会条約」抜粋 第1条 定義1
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/hakurankai/jyouyaku.html>
(最終閲覧日2013年5月25日)
- 33) 注26前掲のエッフェル塔管理会社 (SETE) ホームページより
<http://www.tour-eiffel.fr/fr/tout-savoir-sur-la-tour-eiffel/dossiers-thematiques/95.html>
(最終閲覧日2013年12月12日)
- 34) http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Antenne_tour_Eiffel_1914.jpg?uselang=fr
(最終閲覧日2013年5月25日)
- 35) いずれの番組も1924年に始まった。
- 36) パリ・エッフェル塔の下、シャンドマルス公園内にあるフェリエの銅像



- 37) 第29代米国大統領になるウォレン・ハーディング候補 (共和党) のコックス候補 (民主党) に対する当選を速報した。
- 38) 脇田泰子「スポーツ放送の発展とユニバーサルアクセス権」名古屋大学大学院国際言語文化研究科「メディアと社会」第4号p.17、2012年
- 39) 20世紀の通信関連技術を記録したThe National Valve Museumのホームページより
<http://www.r-type.org/articles/art-032.htm>
(最終閲覧2013年5月20日)
- 40) 受信機販売と放送の事実上の独占権が認められた。国王の特許状に基づく現在の公共放送「イギリス放送協会 (British Broadcasting Corporation)」への組織変更は1927年。
- 41) 1837年に18歳で女王即位後には、「王室女優のデビュー」などという見出しも登場している。“The Royal Actress's Debut”, *Figaro in London*, 25 November 1837, p.187
- 42) 『英国王のスピーチ』(2010年・英) は現・エリザベス2世の父、ジョージ6世の史実に基づく映画で、第83回アカデミー賞作品賞を受賞した。
- 43) 1999年7月29日付ウェンブリー・スタジアムの建て替え決定を報じるBBC国内ニュースのホームページより
http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/406613.stm
(最終閲覧2013年12月12日)
- 44) 旧ウェンブリー・スタジアムは1948年ロンドン・オリンピックでは主会場として、初の本格的テレビ生中継が行われた。高さ38.5メートルのツインタワーがトレードマークの「サッカーの聖地」としてもファンに長くお馴染みだったが、老朽化により2003年に解体された。4年後、同じ場所に現在のウェンブリー・スタジアムが完成した。
- 45) 2000年10月1日付BBCスポーツのホームペー

- ジ「ウェンブリー・トリビア（雑学的知識）」
http://news.bbc.co.uk/sport2/hi/in_depth/2000/wembley/952060.stm
 (最終閲覧2013年12月12日)
- 46) イングランド中部シェフィールド出身、クリス・ホップズのホームページ
 The Chris Hobbs Siteの「我が町あれこれ」
 ARTICLES THAT HAVE A SHEFFIELD CONNECTION 15.
 The first Soccer Broadcast Saturday, 22nd January 1927
<http://www.chrishobbs.com/1927broadcast.htm>
 (最終閲覧13年11月26日)
- 47) 英・ガーディアン紙電子版2012年7月18日付
 BBCが今後のオリンピック4大会分の放送権を取得したことを報じる記事の5パラグラフ目の冒頭に、「BBCのオリンピックとの関わりは1928年に遡り、その時、初めてラジオ放送を行った」とある。
<http://www.theguardian.com/media/2012/jul/18/bbc-rights-next-four-olympic-games>
 (最終閲覧2013年9月30日)
- 48) 英・パテ社のホームページより
<http://www.britishpathe.com/video/oly12-olympic-games-watched-by-royals/query/wildcard>
 (5分12秒 最終閲覧2013年5月15日)
- 49) 注9前掲の「ラジオの百年」のホームページより 国営ラジオ局の動向について
<http://100ansderadio.free.fr/HistoiredelaRadio/RadiosdEtat.html>
 (最終閲覧日2013年11月24日)
- 50) 日本でも、ラジオ初期のNHKのアナウンサーたちは、これを「ラジオ的描写」と表現している。「ラジオ放送でうら若い女性を表現する場合、『塀の外を若い女が通った』といえ、説明になる。だが、「カラコロン」と軽い下駄の音を流せば、その音だけで若い女性が歩いていることがわかる。朴歯の音なら書生だ。それがラジオ的描写だ」(橋本一夫『日本スポーツ放送史』p.42大修館書店、1992年) ラジオ時代の夜明けならではの熱いラジオ論が日本にもあった。
- 51) Christian Brochand, *Histoire générale de la radio et de la télévision en France Tome1 1921-1944*, Documentation française, 1994, p.439 « il serait intéressant de faire assister les auditeurs à ce qui se passe dans la rue, et pas uniquement dans un auditorium. »
- 52) 1923年5月6日にパリのビュッファロ競技場で行われたフランス・ヘビー級タイトル・マッチ。第2章既出の米国初のスポーツ生中継放送となったデンプシー戦の相手だったカルパンチエとニルの一戦で、カルパンチエが第8ラウンドでKO勝ちした。
- 53) この手法を日本では「実感放送」と呼ぶ。1932年ロサンゼルス・オリンピックの際、日本初のラジオ生中継を行うために太平洋を渡ったNHKの取材・放送スタッフを待ち受けていたのは、現地放送局の手違いにより生放送が不可能になったという知らせであった。ディレクターやアナウンサーは苦肉の策として、レースを先に見て後から実況を再現した。実際の競技時間より実況が長くなってしまふことがあり、10秒ほどのレースに過ぎない陸上男子100m決勝に約1分の実況をつけた逸話も残っている。
- 54) Parleur Inconnuという伝説のニックネームは、英語ではUnknown Speaker、知られざる話し手の意。ここでは「匿名リポーター」と訳出した。
- 55) Max Favalelli, J'ai psychanalysé D a m e Radio, *Radio 49*, n° 268, p.74-75, 1949
 Fabien Wille, *Le Tour de France: un modèle médiatique*; [1903 - 2003], Presses Universitaires du Septentrion, 2003, p.49-53
 André Rauch, L'oreille et l'œil sur le sport,

De la radio à la télévision (1920-1995), Le spectacle du sport., *Communications*, 67, 1998, p.193-210

- 56) 注9 前掲の「ラジオの百年」のホームページより

<http://100ansderadio.free.fr/>

HistoiredelaRadio/Lesannees20.html

(最終閲覧日2013年6月10日)

- 57) André Rauch, *L'oreille et L'oeil sur le sport*, 前掲書p.198 « Lors de la finale de football des Jeux olympiques, qui oppose l'Uruguay à la Suisse, journalistes et organisateurs s'entendent pour interdire l'entrée du stade de Colombes à tout personnel radiophonique. » 「ウルグアイ対スイスのオリンピック・サッカー決勝に際して、ジャーナリストと組織委員会は、あらゆるラジオ関係者のコロンブ・スタジアム（1924年パリ・オリンピックの主会場）への立ち入りを禁止することで意見が一致した。」

- 58) André Rauch, *L'oreille et L'oeil sur le sport*, 前掲書p.198

- 59) *Antennes*, n° 26 p.57, 1978

- 60) 第3章で述べたように、P.T.T.はこの頃には国营局を全国に増やす方針を固めたため、民放を抑え、その勢いを削ぐような決定を下すようになっていった。(注49参照)

- 61) 「ラジオの百年」のホームページより 1930年代の南仏にあるラジオ局に関するコーナーの中に、ドゥオルテルがマイクの前に立っている写真も認められる。

<http://100ansderadio.free.fr/>

HistoiredelaRadio/Toulouse-Pyrenees/

Toulouse-Pyrenees30.html

(最終閲覧日2013年10月25日)

- 62) 「ネット生中継 変わる五輪」『読売新聞』
2012年7月22日付朝刊